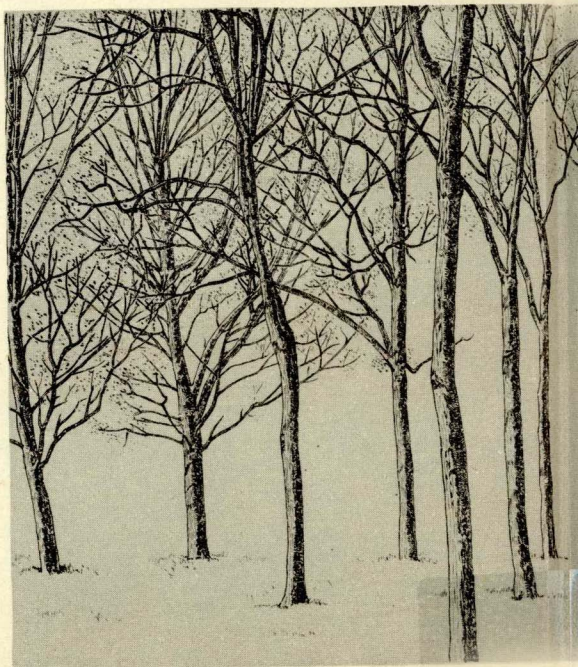


上田敏訳詩集

河盛好蔵編



© 1966

世界の詩 32

上田敏訳詩集

昭和41年5月25日 初版発行

昭和49年9月25日 5版発行

編 者 河 盛 好 蔵

発 行 者 津 曲 篤 子

印 刷 者 岡 橋 清 治

発 行 所 株式会社
彌 生 書 房

162 東京都新宿区中町18番地
電話・東京(260)3707(代表)

0392-66042-8525

上田敏訳詩集

河盛好蔵編

彌生書房

表紙装画 駒井哲郎

上田敏詩集
目次

海潮音

ガブリエレ・ダンヌンチオ

燕の歌

声曲

ルコント・ドウ・リイル

真昼

ホセ・マリヤ・デ・エレディヤ

床

シュリ・プリユドン

・夢

シャルル・ポドレエル

信天翁

人と海

梟

ポオル・ヱルレエヌ

譬喩

よくみるゆめ

落葉

ギクトル・ユウゴオ

良心

キルヘルム・アレント

わすれなぐさ

カアル・ブツセ

山のあなた

三

三

四

六

七

六

三

六

九

七

オイゲン・クロアサン

春の貢

四

秋

ダンテ・アリギエリ

三

ヘリベルタ・フォン・ポシンゲル

心も空に

四

わかれ

エミール・エルハアレン

五

テオドル・ストルム

鷺の歌

四

水無月

ジオルジュ・ロオデンパツハ

四

ロバート・ブラウニング

黄昏

五

春の朝

アンリ・ドゥ・レニエ

四

キリアム・シェイクスピア

銘文

三

花くらべ

フランシス・ギエレ・グリフィン

三

ダンテ・ゲブリエル・ロセツティ

延びあくびせよ

五

アルベエル・サマン

伴 奏

ステファンヌ・マラルメ

嗟 嘆

テオドル・オオバネル

白 楊

故 国

海のあなたの

海潮音拾遺

印度古詩

きみがまなこは青蓮に

六

六

六

六

六

六

をとめなれども、足曳の

足は向けども心はむかぬ

ゆく水の、はやくも君を

蔓草の觸びし姿

サツフオ

夕づつの清光を歌ひて

君のねがひ

忘れたるにあらねども

ダンテ・アリギエリ

びるぜん祈禱

あはれ今

泣けよ恋人

きその日は

アルフレッド・ドウ・ミュッセ

六

六

六

七

七

七

七

七

七

七

六

春夜

六〇

モリス・マアテルリンク

ペドロ・アントニオ・デ・アラルコン

祈 禱

一〇〇

「黒瞳」より

六一

愁のむろ

一〇一

燧 玉

一〇二

エミール・エルハアレン

牧羊神

都 会

一〇五

トリスタン・コルビエエル

フェルナン・グレエグ

蟾 蜍

六一

われは生きたり

一一三

ジユル・ラフォルグ

ポオル・フォオル

月 光

六八

両替橋

一一八

ピエロオの詞

七〇

このをとめ

一二三

冬が来る

七二

別 離

一二三

日 曜

七五

夏の夜

一二三

レミ・ドウ・グルモン

髪

二五

雪

二七

終冬青

二六

牧羊神拾遺

ルイ・ベルトラン

五本の指

二三

ステファンヌ・マラルメ

エロディヤツド

三四

白鳥

三九

薄紗の帳

四〇

アルテュル・ランポオ

風とるひと

四三

ポオル・クロオデル

椰子の樹

四五

作者紹介

解説

四五

四八

口絵写真／一九二一年（三八歳）の上田敏

口絵筆蹟／「海潮音」詩稿（一九〇五年頃）

海
潮
音

ガブリエレ・ダンヌンチオ

燕の歌

弥生^{やよひ}ついたち、はつ燕、

海のあなたの静けき国の

便^{たより}もてきぬ、うれしき文^{よま}を。

春のはつ花、にほひを尋^とむる

あゝ、よろこびのつばくらめ。

黒と白との染分^{そめわけ}縞^{じま}は

春の心の舞姿。

弥生来^{やよひ}にけり、如月^{きさらぎ}は

風もろともに、けふ去りぬ。

栗鼠の毛衣脱ぎすてて、

綾子羽ぶたへ今様に、

春の川瀬をかちわたり、

しなだるゝ枝の森わけて、

舞ひつ、歌ひつ、足速の

恋慕の人ぞむれ遊ぶ。

岡に摘む花、董ぐさ、

草は香りぬ、君ゆゑに、

素足の「春」の君ゆゑに。

けふは野山も新妻の姿に通ひ、

わだつみの波は輝く阿古屋珠。

あれ、藪陰の黒鶴、

あれ、なか空に揚雲雀。

つれなき風は吹きすぎて、

旧巢脚へて飛び去りぬ。

あゝ、南国のぬれつばめ、

尾羽は矢羽根よ、鳴く音は弦を
「春」のひくおと、「春」の手の。

あゝ、よろこびの美鳥よ、

黒と白との水干に、

舞の足どり教へよと、

しばし招がむ、つばくらめ。

たぐひもあらぬ麗人の

イソルダ姫の物語、

飾り画けるこの殿に

しばしはあれよ、つばくらめ。

かつけの花環こゝにあり、

ひとやにはあらぬ花籠を

給ふあえかの姫君は、

フランチェスカの前ならで、

まことは「春」のめがみ大神。

声もののね
曲

われはきく、よもすがら、わが胸の上うへに、君眠る時、
吾は聴く、夜の静寂しじまに、滴したの落つるを將はた、落つるを。
常にかつ近み、かつ遠み、絶間なまなく落つるをきく、
夜もすがら、君眠る時、君眠る時、われひとりして。

真 昼

「夏」の帝の「真昼時」は、大野が原に広がりて、
白銀色の布引に、青天くだし天降しぬ。
寂たるよもの光景かな。耀く虚空、風絶えて、
炎のころも纏ひたる地の熟睡の静心。

眼路渺茫として極無く、樹蔭も見えぬ大野らや、
牧の畜の水かひ場、泉は溜れて音も無し。
野末遙けき森陰は、裾の界の線黒み、
不動の姿夢重く、寂寞として眠りたり。

唯熟したる麦の田は黄金海と連なりて、
かぎりも波の揺蕩に、眠るも鈍と嘲みがほ、
聖なる地の安らげき兒等の姿を見よやとて、
畏れ憚るけしき無く、日の觴を嘯み干しぬ。

また、邂逅に吐息なす心の熱の穂に出で、
曝声のそこはかと、鬚長鬚の胸のうへ、
覚めたる波の揺蕩や、うねりも貴におほどかに
起きてまた伏す行末は沙たち迷ふ雲のはて。

程遠からぬ青草の牧に伏したる白牛が、
肉置厚き喉袋、涎に濡らす備げさ、
妙に気高き眼差も、世の煩累に倦みしごと、
終に見果てぬ内心の夢の衢に迷ふらむ。